

# 仏ホメ通信 令和3年 3月号



## 長女マヤズムについての考察

「失敗しないために行動しないという結論を導き出させる長女マヤズムの力、手ごわい」。「一方で行動派の長女マヤズム感染者もいるがその原動力は人の目特に親の期待に応えようとするもの」。これらは先日行ったフェイスブックでの投稿。この投稿がかなりの長女マヤズム感染者たちの心をくすぐったようで、多くの共感と反感を得たように感じる。

結局のところ、僕の言う「長女マヤズム」とは「過度に人の目や世間体を気にする日本の『恥の文化』が生み出した癌マヤズムの一種」である。

実際に長女であるかは関係なく、次女であろうが、末っ子であろうが、弟であろうが、このマヤズムは感染する。そのため、従来の癌マヤズムのノゾースである乳癌由来のCarcinosinではなく、日本で男女共に罹患者、死亡者ともに上位の大腸癌由来のCarcinosin-Colonを作るべきだが、今の倫理観では難しく、レメディーによる対処は、やはり従来の抗癌マヤズムレメディーに委ね、併せてインナーチャイルド癒しをしこたまやらなければならないの。

この長女マヤズムを克服するために一押しなのは僕が推進する仏道ホメオパシーである。僕はこの長女マヤズムを弟でありながら感染し、克服した経験を持つため、そのような僕の気の抜けたゆるい性質を求めて来るのだろう、実に当センターのクライアントの8割以上が実際に長女だったり、このマヤズムに苦しんでいる方たちである。今年の5月中には長女マヤズムを克服して真の出家に至る方法を記している書籍「仏道ホメオパシー」を出版予定なのでぜひご購入いただきたい。僕の5,000円の講座2本立て以上の内容なので1万円以上で売りたいところ！なのですが、買って貰えないと意味が無いので税込3,300円で販売予定なのです！

## バイタルフォースの新たな定義

ホメオパシーにはバイタルフォースと呼ばれる人間の生命力に関する概念がある。これは両親から受け継いだエネルギー（先天の気）、生まれてからの衣食住の質によるエネルギー（後天の気）、そして生殖能力（精力）という3つの組み合わせであると言われているが、アフターコロナに予想されるこれからのサバイバルな世界においては上記に加え、例えば野菜を作ったり、魚を捕まえたり、家を建てたり直したり、洋服を作ったりといった「生きる力」も入れるべきと仏道ホメオパスは考えるのでした。

## あやしさを全開で行け！～その4～ たとえレメディーが使えなくなっても！

前回で述べたように今後、ホメオパシーのレメディーが規制され、入手できなくなる可能性があるかもしれない。そうなった時に僕たちホメオパスはどうやってこの療法を続けていけば良いのだろうか。世界の闇の力は自己治癒力などに人々の目を向けさせたくなく、ずっと半病人のまま生かし薬を取り続けさせようとしているよう感じられないか？そうだとしたら自然治癒力を触発してお金もかからず自力で病気を治そうなどというホメオパシーは特に敵対視され、ホメオパシーへの感心が高まれば高まるほど、ホメオパシーレメディーが規制される可能性も高まる気がしてならない。もちろん杞憂であってほしいのだが、起きた時に「そんなバカな！」と成す術無く立ち尽くすようでは困るだろう。だから僕はいつそれが起きてもホメオパシーを続けられる方法を模索しているのだ。その方法が2話目で取り上げた「髪の毛を使った遠隔によるレメディー投与」。そしてレメディーが衛生上の理由など、不当な疑いを掛けられ世に出回らなくなったとしても、レメディーのエネルギーを作り出し、送る装置がある。それがレメディーマシンだ。もちろんQX-SQIOであっても、ニュースキャンであっても、メタロンであっても良いのだが。レメディーのエネルギーを遠隔で送れる装置があれば、たとえレメディーが取り上げられたとしても僕たちは活動していける。レメディーマシンと言うのはレメディーにしたい物質を片方のポケットに入れて、反対のポケットにブランクと呼ばれる空の砂糖玉を置いてスイッチを押す、またはレメディーごとに番号が振られており、作りたいレメディーの番号を入力してスイッチを押せばレメディーを創ることが出来る、眉唾トデモなマシン！「こんなレメディーが本当の効くのだろうか？」と疑いたくなるのもよく分かる。僕もそうだったけど、英国のホメオパシー学校での卒業ケースはすべてマシンレメディーで改善に導いたものだった。だからマシンのレメディーでも作用は確信している。エネルギー療法の世界は奥深いのだ。そしてクライアントに遠隔で投与したい場合はDr. MKサハーニに倣って、クライアントの髪の毛を送ってもらい、その髪の毛をマシンのポケットに入れて処方したいレメディーの番号を入力してスイッチオンするのだ。これはまだ試したことはないが、僕はこの方法が上記のような「レメディーショック」が起きてもホメオパスを続けられる一つの方法として提案したい。もちろん髪の毛に、ではなくクライアント本人にレメディーマシンで作った砂糖玉を郵送しても良いのだが、何故か怪しい方を選択したい自分がある。このようにして「あやしさを受け入れた先には、僕の「死ぬまでホメオパス」という目標が担保されているのだ。「怪しさを全開で行け！シリーズ」、これにて、とりあえず本編完結。次回は番外編をお届けします。

